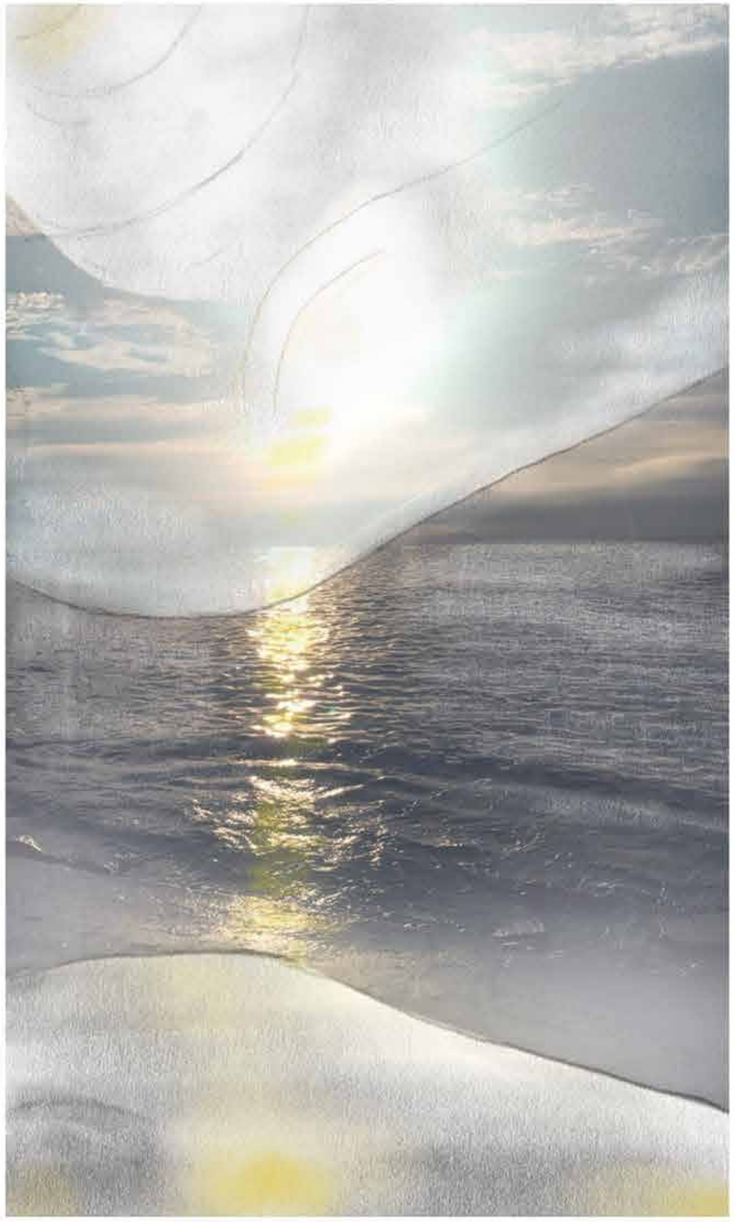
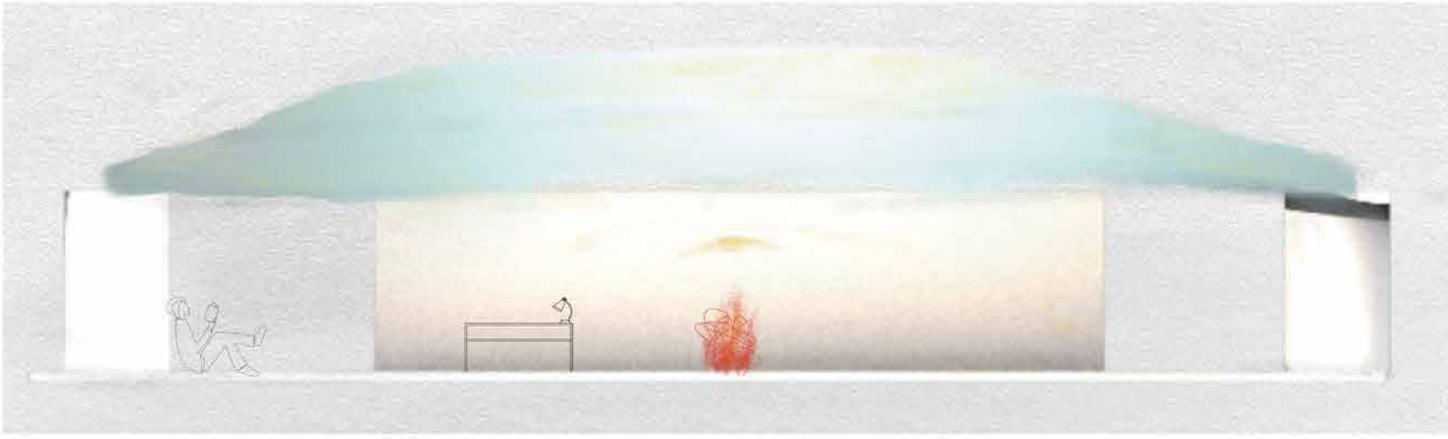
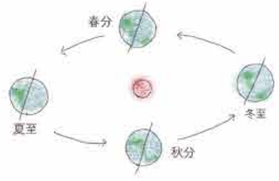




空と光の野生

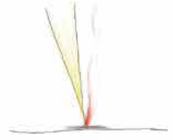
野性とともに暮らす
古くから人間は空の制御できない野性的な側面とともに暮らしてきたが、現代の都市では空と人のつながりは希薄に感じられる。
テレワークやリモートが一般的になった時代。
都会に定住する必要はなく、地方に散らばって生活を営むことができる。地方などの人が少ない地域は空を自然に感じることのできる環境なのではないか。
そうした情報時代の暮らしの中に、空と人間の関係から生まれる小さな野性を盛り込む。
ガラスを通じて生成される光の形とそれに付与される意味が、暮らす人に根源的な知性作用を与える。
それは自分なりの生活様式を再考するきっかけになる。



春分・秋分の日は輪状の光が落ちる。

一日の時間が光の位置で示される。

昼になると太陽光が一点に集まり、火が灯される。



あらかじめ光の入射角を計算し、どこにどのような光を落としたいかを決めておく。3D プリンタで厚み、形状を変えながらガラスを出力することで、ガラスに入射した太陽光を意図した形に変換する。
高度なテクノロジーによって作られたひとつながりのガラスの塊は、火を灯したり、日時計のように時間を知らせたりする。そうしたシンプルな機能はどこか野性的な原始の文明を感じさせる。

NEG0269_1